

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	チャイルドステーション ゆうゆう			
○保護者評価実施期間	令和 8年 1月19日 ~ 令和 8年 1月30日			
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	19名	(回答者数)	18名
○従業者評価実施期間	令和 8年 1月19日 ~ 令和 8年 1月30日			
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	9名	(回答者数)	9名
○事業者向け自己評価表作成日	令和 8年 2月18日			

○分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	幅広い年齢層の子どもたちの関わり (小学1年生から高校3年生まで活動している)	年齢の異なる子どもと過ごすことで、日常生活において必要なスキル等を真似しながら習得したり、関わり方（上下関係）を学んだりできるよう、子どもたちの関わりを大切にしている。	事業所内だけでなく、地域の子どもたちとの関りができるよう、町内会からの子どもたちの状況やイベント等の情報収集に努める。
2	保護者の要望に応えた送迎の実施	保護者の要望に応えられるよう送迎時間の調整等を行うことで、保護者の負担減につながっていると思われる。	保護者の要望に対応できるよう、都度職員間で話し合い調整を行っていく。 また、連絡帳、電話、メール等活用して、要望を確認していく。
3	個に応じた支援の提供	個性を理解し、思いを伝えやすい環境づくりをする。また、職員間で連携を取り、こまめに情報交換することで誰でも支援できるように努めている。	個別支援計画に基づいた、支援の成果と課題の定期的な分析と見通しを図っていく。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	日常生活スキルの幅広さへの対応 (小学1年生から高校3年生まで活動している)	年齢だけでなく、日常生活スキルの収得状況に幅の広がりにある子どもたちに対して、個々に見合った内容の活動を提供する難しさがあること。	同じ内容の活動であっても、個々の特性や難易度を考慮した参加方法を考え、提供していく。併せて個々の強みや課題を把握していく。
2	職員の適正な配置数と専門性の充分な発揮	職員対子どもの比率は確保されてはいるものの、子どもの障害特性により個別の対応が必要になったとき、送迎による一定時間の職員の不在、さらに事務処理のための支援現場からの離脱等の要因で、どうしても人手不足を感じてしまうことがある。 また、専門性については子どもたちの活動の内容や環境の調整が十分に行われているかの検証が必要であり、スキルアップのための研修への参加の機会が少ない。	利用者の状態やその日の利用者数にもよるが、職員間で現状確認を行い、ケガや事故の危険性を排除しながら、利用者把握に努める。 また、職員のスキルアップについては、内部研修や関係機関主催による研修への参加の機会を増やすなど、計画的な実施に努める。
3	地域連携	発達障害や知的障害などの障害を持った子どもが利用している放課後等デイサービス事業所の存在や必要性についての情報発信が足りないと思われる。	行政主導で立ち上げられた「障害者地域自立支援協議会」の活動が、令和8年4月から本格化されることになった。構築されるであろうネットワークにより、関係機関との連携、支援者間の交流、情報の共有化が図られる。